実用性にすぐれた芸術品 紅花と米沢織りを世界へ

紅花香黄染め染料の粉末化と洋装品の開発

土地柄・課題　不思議な紅花のチカラ

山形の県花「紅花」。生産量日本一の白鷹町で、紅花栽培と紅餅の出荷、加工品の販売を手掛けているのが紅花音羽屋です。屋号である「音羽屋」は宝暦9年に創業し、紅花文化が栄えた江戸時代には、地区で栽培された紅花の取りまとめを行っていました。しかし明治以降、化学染料の主流により紅花産業は衰退し消滅してしまいます。ところが昭和20年代、農家の納屋にあった種が発芽したことで知識人が集まり、紅花栽培が再開。先代も種を譲り受けました。紅花は病気になりやすく天候に左右されやすい繊細な花。その後、数多の失敗を繰り返しながら12代目が種を守り、13代目が栽培を復活、14代目の石井美由樹さんが「紅花音羽屋」として継承しています。栽培には時間も労力もかかり費用対効果の低さが課題ですが、紅花の魅力を次世代にも伝え続けるため、これまでに天然成分にこだわった紅花の化粧水や石鹸、ハーブティーやお茶漬け等の加工商品を開発しました。

ある時、紅花染めの染料となる紅餅の加工中、手の血行が良くなり皮膚がなめらかになっていることに気づいた石井さん。原因を考え「花弁を発酵し、寝かせる途中にたまる抽出液」に着目。この液は、独特の匂いと布が均一に染め上がらないことから廃棄されていましたが、成分分析により紅花の中でも薬効成分の高い、カルタミン（抗菌性・抗炎症性）やポリフェノール（抗酸化作用）の含有量が多いことが判明。当時、薬学研究所で研究員をしていた弟の佐藤公典さんより監修を受け、5年の歳月をかけ、メディカルハーブを応用しながら抽出液の問題を解決した染色液を開発。平成28年には「紅花香黄染め」と名付け商標登録をしました。今回の開発では、この紅花香黄染めの粉末化と、新たに紅花染めのショールの開発を進めます。

紅花音羽屋 音羽屋小右衛門
13代目 新野いくこさん（右）14代目 石井美由樹さん（左）

連携の経緯　紅花生産者として、地域にかける思い

白鷹紅を咲かせる会は、平成6年に8名の有志で設立。伝統の紅花を復活させ、地域の産業にしたいという思いで活動しています。会では、山形県紅花生産組合連合会の指導により「紅餅」「摺り花」「乱花」の加工技術を習得し、江戸時代同様の方法で花を摘み、加工・出荷。会員への指導も行い、技術の向上に努めています。近年、生産者の高齢化や丁寧で手間暇のかかる紅花での生計は専業農家では厳しく、紅餅の原料生産以外の付加価値をつけた取り組みの必要性を感じ、本事業で連携するに至りました。

事業実施体制　（事業期間 H29.2 ～ H30.9）

〈農林漁業者〉
白鷹紅を咲かせる会
（紅花生産、紅餅加工、有用液抽出、高品質な有用液抽出技術の確立、供給）

（連携）↓↑

〈中小企業者〉
紅花音羽屋
（紅花香黄染め有用液粉末化開発、洋装品の企画・デザイン・販売）

（協力）←→

〈中小企業者〉
鈴忠織物㈲
（洋装品のデザイン・縫製）

工夫→成果　世界一の美しさを広めたい

紅花香黄染めの粉末化では、紅花の染料成分を抽出するため、10種類以上の化学薬品や植物由来の成分と混ぜ合わせた実験を実施。最終的には専門機関の技術により、紅花だけで粉末化することに成功しました。ショールはこれまでも首に巻くタイプを製作しており、シルク素材で夏は涼しく冬は温かいのが特徴。頭から被ると紅花の薬効成分により髪の毛の乾燥を防いでくれる優れものでした。

石井さんはこのショールを海外の方にも使っていただきたいと考え、砂漠の国で頭から被るために作られた「ヒジャブ」と呼ばれる布に着目。女性が使用するヒジャブは宗教的な理由以外に、紫外線で髪の毛や皮膚が乾燥してしまうのを防ぐ役割があることを知ります。そこで新商品のショールは、既存のものより大判サイズにすることにしました。生地は、山形県米沢市の伝統工芸「米沢織」の織元である鈴忠織物有限会社へ依頼し「紅花の生命力を表現し、世界で一番美しい織物を作りましょう」と協力していただけることに。上質なシルク素材で織っていただき、紅花染めには石井さん自ら携わりました。

今後の課題・展望　植物のパワーを活かすために

こうして、紅花の自然な蛍光色とシルク生地のドレープが軽やかに広がる美しいショールが完成。「想像以上に素敵で、手にした時は感動しました」と石井さん。完成したショールは、町内の女性たちによって手作りされた巾着バッグに包まれ、桐箱に入れてお客様の元へ届けられます。また、ショールと同じ素材で、顔まで覆うことも出来るネックカバーも製作しました。今後は、県内だけでなく、宮城県や首都圏を中心に、物産店やショップ、デパートなどでの販売を検討し、国外への販売も想定しているとのこと。紅花音羽屋の新商品は、世界を視野に羽ばたいていきます。

ショールとネックカバーの着用イメージ
12 代目の新野ハル子さん（中央）と一緒に

紅花畑と
粉末化した紅花香黄染め

事業の今 これから　令和元年12月現在

紅花音羽屋の活動を幅広く応援していただけるようクラウドファンディングにも取り組まれた石井さん。完成した新商品は、その返礼品として贈られたほか、イベント出店や個々の注文にて販売してきたとのこと。「購入いただいたお客様が韓国のご友人にプレゼントしたところ気に入っていただき、韓国の方からも多数お求めいただきました」とのこと。また、世界への発信ツールとして海外向けのフライヤーを作成。商品をまとった人物の撮影では、カメラマンからの紹介でジャカルタの女性がモデルに起用されました。「来年始めには、関東方面でのワークショップを予定しています。その際に、現在作成中の新しいパンフレットとともにショールの展示もする予定です」と話してくれました。これからも国内外へ紅花の魅力を伝えていく紅花音羽屋の取り組みは続いていきます。

会社概要
紅花音羽屋
住　所／〒992-0832 白鷹町大字荒砥乙892-1
電　話／0238-85-6241
ホームページ／https://www.benibana-otowaya.jp